統合失調症当事者の語りのテキストマイニング
闘病記のタイトル分析を中心に

小平朋江 聖隷クリストファー大学看護学部准教授
いとうたけひこ 和光大学現代人間学部心理教育学科教授

KEY WORDS：テキストマイニング，統合失調症，闘病記，ナラティブ，知識創造

はじめに

当事者の病いの語り（ナラティブ）は実践や研究，教育など多様な分野で注目されるようになり，Kleinman（1988）が，「慢性の患者は，自分の病いについての専門家」「学生の経験は，患者の世界から生まれた伝記やフィクションを読むことによって豊かなものにすることができる」と述べた通りである。

筆者らは当事者の知恵が豊かに含まれる闘病記などのナラティブは，看護学などの教材として活用できることを提案し，そのような教材を「ナラティブ教材」と命名した（小平，伊藤，2009；小平，いとう，2010ab）。看護学教育および看護師の知識創造にとって，当事者のナラティブの意義は大きい（小平，いとう，2010ab）。

本稿では，まずウェブサイトや闘病記における統合失調症の語り（ナラティブ）の重要性について述べる。次に，筆者らによる，テキストマイニングの手法で統合失調症当事者の語りの構造を，質的量的に明らかにした研究を紹介する。そして，217冊の統合失調症闘病記のタイトル分析を行なった研究について述べ，当事者の語りをテキストマイニングで分析することの意義を論じたい。

1. 統合失調症当事者の語りの重要性

北海道浦河町にある精神障害者のコミュニティである浦河べてるの家の当事者研究は，仲間や関係者と連携しながら自分の助け方について研究すること（向谷地，2009）である。この実践は現象学においても，専門知に対し，「障害に関する知をつくりだしつつある」「さまざまな専門知のあり方の再考をも迫る」（石原，2013）と論じられるようになった。当事者研究に取り組む当事者からは，自分の言葉で語る経験を，「自分自身とその障害を知る勉強になる」「他者がいる中で話すことによって客観性を少し入れた中で『どうすればあの感じが通るかな』と考えながら言葉を獲得していく」（Necco当事者研究会，2013）としている。

当事者が主人公のコミュニティをつくるためには当事者のナラティブを大切にし，それを紡ぎ出し，またそれに傾聴することの重要性が大きく（小平，いとう，向谷地，2011；小平，いとう，2012a），当事者同士のナラティブによって成り立つ当事者研究は知識創造の活動としてサイクルをなしているといえる（いとう，2012）。そして，ナラティブ・ベイスト・メディスン（NBM）として「ナラティブの書き換え」（斎藤，2003）が論じられるように，回復の過程で語り手と聞き手が言葉をつくして対話し，つながることで，語り手と聞き

手の双方に，自分の新たな生き方を生み出すといえよう。

筆者の所属する大学がある静岡県浜松市においても，統合失調症当事者の語りを通した活動がみられる。地域に根ざした「じゃんだらにぃ」の実践は，「精神障がいをもった当事者が，病気と付き合いながら生き，回復していくまでの苦悩や苦労，希望やこれからについて語る会」(特別非営利活動法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会，2013)で，昨年の開催の様子はNHKのローカルニュースでも報じられた。浦河べてるの家や浜松市の「じゃんだらにぃ」の活動は，一般に公開された場での実践に取り組んでいる。筆者らはこのような場へ継続して参加し，語りの場における語り手と聞き手の双方にとっての意義を見いだしてきた(小平，いとう，2012a)。公開の形で，一般の人々が統合失調症当事者のリアリティある語りに実際に触れる機会が身近になったといえる。

また，闘病記など，いつでも視聴読が可能な「ナラティブ教材」になりうる語りの媒体は多様で，メディアの種類に着目して分類したところ，①単行書籍，②マンガ・コミックエッセイ，③定期刊行物，④テレビ番組，⑤ビデオ・DVD，⑥ドキュメンタリー映画，⑦ブログ・ウェブサイトの7つに分類できることがわかった(小平，いとう，2012b)。その7つの媒体のうち，いまの時代を象徴するように速く，かつ多くの人とつながることが可能で，多様なナラティブや当事者の知恵が含まれる媒体は，⑦ブログ・ウェブサイトであろう。

伊藤ら(2010)が，当事者研究のプロセスとアウトカムを「構成的(constructive)」「協同的(collective)」「創造的(creative)」の「3C」として特徴づけ，さらに企業活動としての知識創造と当事者研究との比較を行なった(伊藤，小平，向谷地，2010；いとう，小平，向谷地，2011；いとう，向谷地，小平2011；いとう，2012)ように，当事者の語りは苦労の改善に関するアイデアを生み出すものであるといえる。向谷地(2013)は，当事者研究において，「問題や過去の経験というのも宝の山」だと言う。

統合失調症をもつ人々の語りは，当事者・専門家の立場を超えて共有できる知恵として，その宝の山には知識創造の豊かな可能性がある。そして，その宝の山から知恵を発掘して可視化し，共有する可能性を拓くツールがテキストマイニングの手法であろう。

2. 統合失調症当事者の語りの構造をテキストマイニングする

2.1 ウェブサイトを分析した研究

筆者らがウェブサイトを分析した研究では，大高ら(2010)が，浦河べてるの家のウェブサイト「当事者研究の部屋」をテキストマイニングの手法で分析したものがある。この分析では，当事者が自分自身を取り戻す回復のために，仲間とともに当事者研究によって考えるという特徴を明らかにした。そして，当事者の苦労を仲間とともに取り戻すという回復の構造を確認した上で，当事者同士の相互援助活動の重要性を指摘した。

また，孫ら(2010)は，ウェブサイト「JPOP-VOICE」における統合失調症当事者の語りの分析を行なった。この分析では，服薬についての語り，障がい者手帳をもつこと，地域で生きていくこと，他の人や仲間との関係，妄想・幻聴の症状，仕事の継続などの語りがみられ，統合失調症の体験の語りには，地域で生きていくことの意義や人間関係の重要性などの特徴を見いだした。

2.2 闘病記(印刷媒体の単行書籍)を分析した研究

小平ら(2010)は，古川(2001)の闘病記分析を行ない，各章ごとの特徴を見ることで闘病記の構造の可視化を試みた。

闘病記のようなテキストデータの場合，当事者の主観的体験ができるだけ浮き彫りになるような分析をすることが重要である。印刷媒体の単行書

籍である闘病記の場合，章立てがあるので章と章との比較が可能になったり，日時などの記述が明確であれば著者の思いや体験の変化に焦点を当てて追うことが可能である。ある1つの症状(例えば統合失調症に特徴的な幻聴や妄想に関する記述内容)に焦点を絞り込み，当事者の主観的体験に注目するなど，研究者の関心や課題により自由に設定できるのがテキストマイニングの強みであり，持ち味といえる。しかし，1冊の闘病記でもテキストデータは大量であるため，研究者が何に焦点を当てたいのか，なぜその闘病記を選択したのかが明確でないと，実際に出力されたものの意味づけができずに途方に暮れることになろう。逆に，関心や課題が絞り込まれていれば大量なデータにより研究者の知りたい事柄について，より明確に可視化してくれる可能性が高い。

ナラティブとは，「語り手自体も完全には気づいていない『物語の構造』を意味する」(斎藤，2003)とされるが，テキストマイニングの手法によりナラティブの構造を明らかにできる可能性がある。1冊の闘病記，そして複数の闘病記に記述される「問題や過去の経験というのも宝の山」(向谷地，2013)であり，「障害に関する知」(石原，2013)や「智：Knowledgeの塊」(服部，2010)を発掘する可能性に通じるだろう。

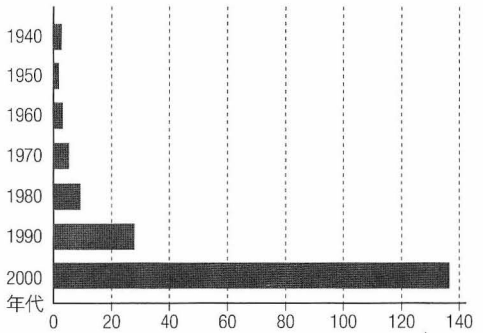
3. 217冊の統合失調症闘病記のタイトル分析

3.1 217冊の統合失調症闘病記リスト

小平ら(2011)が，闘病記など公表された書籍をもとに当事者研究にみられるナラティブを通して形成される精神障害者のコミュニティの意義について考察したように，統合失調症を病む経験の苦労を共有化することは重要である。

そのような考え方のもとに，統合失調症闘病記の単行本がどれだけ発行されているかの実態を明らかにするために，患者本人や家族，関係者などの手により記述された闘病記の可能な限りの検索と収集を試み考察した(小平，いとう，2012b)。その調査において，ウェブサイト，単行本，論文など検索に利用できそうな複数のリソースを手がかりに，当事者や家族などの手により記述された統合失調症の闘病記の単行本に限り，検索と収集を試みた。そして，単行本として出版された闘病記リストを作成し，発行年代別の推移をみるため**図1**の作成を行なった。

図1　1940年代から2000年代までの統合失調症の闘病記(単行本)発行点数の推移



(＊2010年以降の32冊は除外してある)

小平朋江，いとうたけひこ(2012b)．統合失調症の闘病記のリスト―ナラティブ教材の可能性を展望する．心理科学，33(2)，64-77．より

その結果，2012年1月24日現在，筆者らが認識できたのは217冊であった。10年ごとの統合失調症の闘病記の発行点数を見ると，1940年代は2点，50年代は1点，60年代は3点，70年代は5点，80年代は9点と一桁であるが，1990年代に入って29点と一挙に増え，2000年から2009年までは136点と爆発的に増えている。2010年から2012年1月現在までの2年間余りでも32点出版されており，この勢いは今後も続くと思われる。単行本の発行点数からすると，2000年代になって出版が急に増大している。また，発行点数の約1/4は文芸社(自費出版と考えられる)によるものであり，出版に対する当事者の意欲の高さが反映されている。

以上の出版の増加には，2002年の「精神分裂病」から「統合失調症」への病名変更や浦河べてるの家の活動が知られるようになったこと，NHKの教

育番組などで統合失調症当事者が素顔で病名を明かして登場し肉声で語るようになり，病いを抱えて生きる「モデル」を提供したことが背景にあるともいえよう。このことは，精神医療の歴史や時代背景を踏まえれば，精神保健ユーザーである当事者たちの意識の変遷が表われているとも捉えられる。

その当事者たちの意識の変遷とはどのようなものだろうか。闘病記のタイトルには当事者たちの思いが凝集されているのではないか。闘病記の背表紙を眺めていただけでは明確にはならないこの疑問を，テキストマイニングにより，量的な根拠を得ながらたどることはできないだろうか。そのような当事者たちの思いを知ることで，これからの精神医療にとっての援助の方向性や新しい考え方を，当事者視点で見いだすことが可能になるのではないかと考え，闘病記のタイトル分析に取り組むことにした。

3.2 217冊の統合失調症闘病記のタイトル分析

本研究のように時代的な変遷が追えるようなデータの場合，法制度に関することや病名変更，あるいは，そのテーマに関する歴史上の出来事や時事性などの背景を捉え関連づけながら，研究者が明らかにしたいことを明確にしておくことが重要であろう。後述のように，ある単語などがピンポイントで浮かび上がってくれば，当事者の意識や態度の変化の量的な裏づけがとれるため，そのことがその後の研究の進展にとって大きな手がかりとなる可能性がある。続いて，筆者らがテキストマイニングで行なった217冊の闘病記のタイトル分析を紹介したい。

3.2.1 目的

本研究の目的は，前述の闘病記リスト(小平，いとう，2012b) 217冊の書名・副題を対象にテキストマイニングの手法により，その表現の特徴，特に用いられた単語を分析し，時代的変遷を可視化して確認することである。

3.2.2 方法

小平ら(2012b)によって，リスト化されている217冊の統合失調症の闘病記に関する文献情報を分析対象とする。書誌情報データを，テキストマイニングソフトウェアである「Text Mining Studio 4.1」(数理システム)によって分析した。

3.2.3 結果

①全体の書名・副題の形式的特徴(基本情報)

総冊数(217)における書名・副題の平均使用文字数は11.6字であった。述べ単語数は910単語であり，内容語の異なり度数(単語の種類数)は530単語であった。

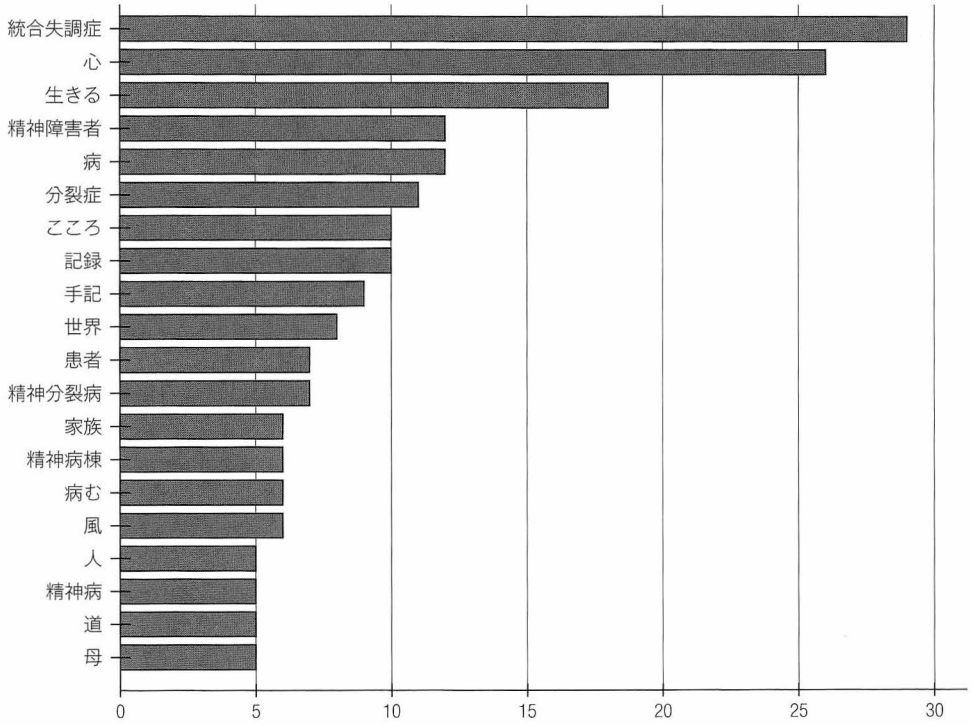
②使用頻度の多い単語(単語頻度分析)

図2のように，最も高い頻度で出現した単語は29回の「統合失調症」で，次に「心」(26回)，次に「生きる」(18回)が現われ，「精神障害者」と「病」の出現頻度は12回であった。ひらがな表記の「こころ」も10回あり，漢字表記と合わせると36回出現し，「こころの病い」としての統合失調症の特徴をよく表わしている。

③3つの時代区分ごとでの使用頻度の多い単語

2002年の病名変更を境にして，それ以前では「分裂病」(10回)，「精神分裂病」(3回)が多く，2003年以降は「統合失調症」(28回)の表現が多く用いられている。しかし，これら3つの単語の頻度を合計しても47回で全体の21.7%であり，書名に病名が出てくることは少ないといえる。時代別に見ると，「分裂病」「体験」「少女」「自分」「記録」「精神病棟」などは2002年以前によく使われた表現であり，「患者」「精神障害」「生きる」は2003～2007年によく使われ，「母」「軌跡」「なれる」「統合失調症」「風」「人生」などは2008年以降によく用いられた単語である。

図2　統合失調症闘病記217冊の表題における単語頻度分析（上位20件）



④書名・副題の病気に関する単語から見た特徴

「精神分裂病」「分裂病」「分裂病者」21件と「統合失調症」29件のどちらかが書名・副題に明示されているものは合計49冊で全体の22.6%であった。詳しくは「精神分裂病」7件，「分裂病」11件，「分裂病者」3件で，時代別に見ると，主に病名変更した2002年以前の書名の2割に用いられていた。「統合失調症」を含む書名は29件で，病名変更の2002年の1件を例外として，それ以外は2003年以降の書名に使用されている。この急増は病名変更で統合失調症患者や家族がよりカミングアウトしやすくなったことの反映であろう。しかし，2003年以前でも以降でも約8割の書名には病名が明示されていない。これ以外の表現として，「病」または「病い」12件のうち11件が「心」または「こころ」という単語と結びついて用いられている。

⑤病気・精神病者「を生きる」当事者から，病気・障害「と（ともに）生きる」当事者への時代的変化

前述のほかに筆者らが注目した単語は，図3に示されるように3番目に多用された「生きる」18件であった。病気や精神病者が「生きる」にかかる書名・副題は11件あり，病気「を生きる」型4件と，病気「と（ともに）生きる」型が7件の2つに分類できた。2002年までは2件とも「を生きる」のみであった。2003～2007年は6件のうち「を生きる」が2件で，4件が「と生きる」「と共に生きる」であった。2008年以降の3件のうち，すべてが病気・障害「と（ともに）生きる」型であった。「を生きる」型の4件は2005年までに限られ，「と（ともに）生きる」型の7件は2003年に2件初出し，2006年以降はこの型に限定されるという時代変遷が確認された。

3.2.4　考察

病名明示が少ない理由としてスティグマ・偏見

の影響，著者の病識や納得の度合い，闘病記の本質としての自分を語ることの意義，の3つが考えられた。病気・障害「とともに生きる」の表現が2003年から現われ，「を生きる」の表現が消えたことは，病いと闘う姿勢から客体化しつつ共生する姿勢へと移行したことの反映であると考えられる。

前述のように，統合失調症当事者の語りは，当事者の素顔と肉声により，公開の場で誰もが聞くことができる時代となった。精神科医師の八木(2009)は当時の闘病記への関心の高まりを取り上げ，「精神医学がこのことに無関心であってはなるまい」と主張しつつ，20数冊の統合失調症闘病記を分析し，「回復過程の物語」として再構成している。本研究で，「とともに生きる」の表現が抽出された結果は，つまり，当事者視点での病いの語りを通した回復の姿を示唆しているといえるのではないだろうか。闘病記を通して，統合失調症からの回復の姿が知られることは，人々にとって偏見を減らすきっかけにもなると考えられる。

服部(2010)は「看護という領域は，智：Knowledgeの塊」であり「知識だけではない直感の世界がある」とし，「この智を抽出して形式化する方法はこれまであまり明らかになっていない」と述べた。テキストマイニングの示す結果は，当事者の手による「障害に関する知」(石原，2013)を可視化し，これまでにない新しい看護援助への展望を拓くためにリアリティある手がかりやヒントとなりうるだろう。

4. テキストマイニングによる分析の限界と課題

テキストマイニングの手法による分析には限界もある。それは，単語の出現の頻度という分析上の基準が，その内容・意味を反映しているかどうかという根本的問題である。テキストマイニングは，言外の意味は拾えない方法だからである(小平，いとう，大高，2010；いとう，2012；いとう，2013)。このような点をどう解決するかが課題といえる。いとう(2013)が提唱するように，質的研究の手法による分析と補完し合うことで克服が可能ではないかと考える。

筆者らの試みでいえば，闘病記のテキストマイニング分析に，西平(1996)の伝記分析の考え方を取り入れている(小平，いとう，大高，2010)。伝記分析という手法は，西平(1996)が集大成した研究方法であり，主に偉人の発達過程における葛藤とその克服を発達心理学理論に依拠しつつ，伝記や自伝を対象に明らかにする方法である。大野(1998；2008)は伝記分析の信頼性，資料の量的比較，心理学的見地からの資料的価値，伝記資料の公共性の4点から肯定的評価を行ないつつ，実証研究との違いとして，解釈と蓋然性をキーワードに問題提起をしている。言い換えると，伝記分析は多様な解釈が可能な文脈での仮説生成的な研究であり，実証主義による仮説検証的な研究とは性格が異なる研究スタイルである。テキストマイニングによる伝記(闘病記)分析では，西平が仮説生成的方法と位置づけた個別分析の方法を踏まえつつ，単語頻度分析などをはじめとするデータマイニングの手法で，西平の仮説生成的手法としての伝記分析に，文字データの多変量解析という仮説検証的な役割をプラスしたミックス法(いとう，2013)が成立するといえる。

おわりに

テキストマイニング分析によって可能になるデータへの意味づけには説得力がある。それは，言語という質的データを量的に分析することがコンピュータとソフトの進歩により可能になったからである。

前述の217冊の闘病記のタイトル分析のように，例えば精神医療の歴史や時代背景を踏まえた形で，当事者の意識の変遷の量的な可視化を可能にしてくれるため，研究者の直感的な実感を質的にも量的にも考察することを可能にする。

そして，テキストマイニングの手法で掘り起こ

され，可視化された当事者のもつ知恵を専門家と共有し，さらに教育的活用も可能にすることで，知識創造の一端に関与できると考えられる。

脳性まひ当事者の熊谷(2013)が当事者研究をめぐって，「言葉にして初めて，体験は，確かに存在したものとして承認され」るとし，「当事者研究の研究」の必要性に言及したように，当事者の語る言葉によって「障害に関する知をつくりだしつつある」(石原，2013)といえよう。『看護研究』46巻3号(2013)で認知症の当事者研究の特集が組まれたように，当事者の語りの重要性の認識は看護の世界で広がりつつある。また前述のように，言葉に焦点を当てたテキストマイニングは手法の限界を抱えつつも，闘病記の発行点数の増加や，北海道の浦河べてるの家や浜松市の「じゃんだらにぃ」などを背景に，最近の当事者活動における実践の意義を捉えながら，「障害に関する知」(石原，2013)を当事者と専門家である実践家や研究者の立場を超えて共有できる可能性を拓くツールになりうるであろう。

以上述べてきたことは，服部(2010)が「新たなナレッジ(Knowledge)の獲得には，暗黙知を形式知に置換，翻訳する作業が重要」として，テキストマイニングの「暗黙知を形式知に変換するプロセス」により「人の意識を超えた処理が可能」となる，という考えにも通じるものであろう。

本研究は平成23年度～平成25年度科研費基盤研究C(課題番号：23593195)(研究代表者：小平朋江)の助成を受けた。

●文献

- 古川奈都子(2001)．心を病むってどういうこと？ ― 精神病の体験者より．ぶどう社．
- 服部兼敏(2010)．テキストマイニングで広がる看護の世界 ― Text Mining Studioを使いこなす．ナカニシヤ出版．pp.2-11.
- 石原孝二(2013)．おわりに．(石原孝二編)当事者研究の研究，医学書院，pp.308-310.
- いとうたけひこ(2012)．知識創造共同体としての浦河べてるの家の当事者研究 ― ナレッジ・マネジメント理論からの分析．(いとうたけひこ編)コミュニティ援助への展望，角川学芸出版，pp.95-131.
- いとうたけひこ(2013)．テキストマイニングの看護研究における活用．看護研究，46(5)，475-484.
- 伊藤武彦，小平朋江，向谷地生良(2010)．ナラティブとしての当事者研究 ― 浦河べてるの家から．日本質的心理学会第7回大会プログラム抄録集，98.
- いとうたけひこ，小平朋江，向谷地生良(2011)．「自分自身で，共に」という当事者研究が開く世界 ― 知識創造モデルの観点から．心理教育・家族教室ネットワーク第14回研究集会抄録集，55.
- いとうたけひこ，向谷地生良，小平朋江(2011)．ラウンドテーブル ― べてる式当事者研究の研究．日本教育心理学会第53回総会論文集，606-607.
- Kleinman, A.(1988)／江口重幸，五木田紳，上野豪志訳(1996)．病いの語り ― 慢性の病いをめぐる臨床人類学．誠信書房．
- 小平朋江，伊藤武彦(2009)．ナラティブ教材としての闘病記 ― 多様なメディアにおける精神障害者の語りの教育的活用．マクロ・カウンセリング研究，8，50-67.
- 小平朋江，いとうたけひこ(2010a)．回復のための資源としての語り ― 精神障がい者のナラティブの教材的活用．心理教育・家族教室ネットワーク第13回研究集会(福岡大会)抄録集，52.
- 小平朋江，いとうたけひこ(2010b)．闘病記などのナラティブ教材の種類と意義 ― メディアの違いに着目して．日本精神保健看護学会第20回総会・学術集会プログラム・抄録集，106-107.
- 小平朋江，いとうたけひこ(2012a)．「当事者が主人公」の実践の在り方を考える ― 統合失調症当事者によるナラティブを手がかりに．(いとうたけひこ編)コミュニティ援助への展望，角川学芸出版，pp.70-94.
- 小平朋江，いとうたけひこ(2012b)．統合失調症の闘病記のリスト ― ナラティブ教材の可能性を展望する．心理科学，33(2)，64-77.
- 小平朋江，いとうたけひこ，向谷地生良(2011)．浦河べてるの家の当事者研究 ― ナラティブとコミュニティの観点から．心理教育・家族教室ネットワーク第14回研究集会抄録集，56.
- 小平朋江，いとうたけひこ，大高庸平(2010)．統合失調症の闘病記の分析 ― 古川奈都子『心を病むってどういうこと？ ― 精神病の体験者より』の構造のテキストマイニング．日本精神保健看護学会誌，19(2)，10-21.
- 熊谷晋一郎(2013)．エピローグ当事者研究が語り始める．(石原孝二編)当事者研究の研究，医学書院，pp.302-306.
- 向谷地生良(2009)．技法以前 ― べてるの家のつくりかた．医学書院．
- 向谷地生良(2013)．Interview当事者研究ができるまで．(石原孝二編)当事者研究の研究，医学書院，pp.150-175.
- Necco当事者研究会(2013)．Discussion当事者研究をやってみた．(石原孝二編)当事者研究の研究，医学書院，pp.292-301.
- 西平直喜(1996)．生育史心理学序説 ― 伝記研究から自分史制作へ．金子書房．
- 大野久(1998)．伝記分析の意味と有効性 ― 典型の研究．青年心理学研究，10，67-71.
- 大野久(2008)．伝記研究により自己をとらえる．(榎本博明・岡田努編)自己心理学1自己心理学研究の歴史と方法．金子書房，pp.129-149.
- 大高庸平，いとうたけひこ，小平朋江(2010)．精神障害者の自助の心理教育プログラム「当事者研究」の構造と精神保健看護学への意義 ― 「浦河べてるの家」のウェブサイト「当事者研究の部屋」の語りのテキストマイニングより．日本精神保健看護学会誌，19(2)，43-54.
- 斎藤清二(2003)．ナラティブ・ベイスト・メディスンとは何か．(斎藤清二・岸本寛史著)ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践．金剛出版，pp.13-36.

• 孫波，いとうたけひこ，大高庸平，小平朋江(2010)．ウェブサイトJPOP-VOICEにおける統合失調症の当事者の語りの特徴．心理教育・家族教室ネットワーク第13回研究集会(福岡大会)抄録集，54.
• 特別非営利活動法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会(2013)．じゃんだらにぃ．http://www.npo-e-jan.com/modules/bulletin/index.php?storytopic=17
• 八木剛平(2009)．手記から学ぶ統合失調症 — 精神医学の原点に還る．金原出版.

こだいらともえ●聖隷クリストファー大学看護学部
〒433-8558　静岡県浜松市北区三方原町3453

NURSING BOOK INFORMATION ―― 医学書院

質的研究のピットフォール
陥らないために／抜け出るために

萱間真美

●A5変型　頁124　2013年
定価2,100円(本体2,000円＋税5%)
[ISBN978-4-260-01847-0]

数多くの質的研究を行い、論文指導の経験も豊富な著者の目の前で大学院生が落ちた、著者自身もろともに落ちた、質的研究における“ピットフォール（落とし穴）”の数々を読み物風に紹介。質的研究を始める人がそうした陥穽に陥らないために、すでに行き詰まりを感じている人がそこから抜け出すために、実践的にアドバイス！　著者の経験に基づいた、心に沁み入るアドバイスで、前向きに研究に取り組むエネルギーもup!

医療者のためのExcel入門
超・基礎から医療データ分析まで

田久浩志

●B5　頁200　2013年
定価2,415円(本体2,300円＋税5%)
[ISBN978-4-260-01845-6]

Excelの基本的なキー操作といった“超・基礎”から、便利な集計機能「ピボットテーブル」を駆使したデータの集計・分析、グラフ作成のポイントまで、豊富な画面例でやさしく伝授。医療現場を想定したサンプルデータを用いているので、身近な業務データの整理にも即役立ちます！「スライド原稿を作る便利ワザ」など、医療者がより便利にExcelを使いこなすための有益な情報も満載。